

ヤンゴン素描 45

鉢を抱えて天を仰ぐシン・ウパゴー（ウパグプタ）・続

おさかな姫伝説と、坊さんを介さない供養の伝統

山形洋一

ウパグプタの母親にも、ブッダの母マハー・マーヤー（摩耶）と同じような処女懐胎の伝説があります。それによるとウパグプタの母親は、金色の大きな魚の腹の中から救い出された、金色に輝く女の子で、マチャ・デーヴィー（おさかな姫）と名付けられました。

このお姫様、王様の養女に迎えられ、どんどん美しく育っていったのですが、困ったことに、育つにつれて魚の腐ったような臭いがひどくなります。王様もこの匂いに我慢ができなくなり、姫を筏に乗せて川に流しました。

それを拾って育てた行者の精を受けて、彼女は身ごもり、やがてウパグプタが生まれた、と伝えられます。それが北インドの古都マトゥラーのグプタ香水店とどう結びつくのかというと、まったくむすびつかない。マチャ・デーヴィー伝説は北インドの伝説とは別に、東南アジアを中心に語りつがれてきたもののようです。

ミャンマー、タイ北部、ラオスでは、ウパグプタが今でも筏に乗り、南の海の真ただ中を漂っていると信じられています。大きな祭りがあるときは、まずウパグプタをお迎えして、マーラ（魔羅）が風雨を起こして邪魔しないよう、見張ってもらいます。そうして祭りのあとでウパグプタを筏に載せ、川から海へとお帰りいただく。日本の精霊（しょうりょう）流しと似ていますね。

ヤンゴンのメーラムー（マングローブ姫）のお寺にも、ウパグプタの像があります。大ワニの口に近くの池に、青竹を組んだ筏に乗り、真鍮のお堂の中で、お鉢に右手を入れ、空を仰いでいます。筏の周囲を、蛇や魚やウミガメその他、恐ろしげな海の生き物たちが取り巻いています。このお寺の彫刻は、人物像より動物の方が良くできていて不思議です。

ところで上座部のお坊さんたちはウパグプタ信仰を公認せず、ただ黙認しているようです。かつて説一切有部（せついつさいうぶ）という仏教教団が栄えたことがあり、ウパグプタはそのリーダーの一人だったようです。ただしアショカ王の王師だと主張したため、上座部の伝説と折り合いがつかず、パーリー語經典には一切言及されない、とのこと。

ミャンマーではバガン王朝のアノーヤター王による徹底的な宗教改革があったにも関わらず、ウパグプタ信仰はしぶとく生き残りました。上座部のお坊さんを通さず、民衆がじかに供養できるところが、魅力のひとつなのでしょうが、それについても面白い伝説があります。

マーラ（魔羅）退治にかかる前、ウパグプタは修行僧たちを見回して、だれか飯を分けてくれと頼みました。すると一人が、自分の鉢にはいつも四人前入るので、一人前残しておいてくれれば残りをさし上げよう、と申しでました。それは有り難いが、どうして手に入れたものかと訊くと、前世で四人の修行僧と友達になり、いつも自宅に呼んで一緒に食事をしてきた善根のおかげで、毎日四人分の食事が手に入るのだとのこと。なんだ、それじゃあご両親の功德であって、君の功德ではない。そんな不純な糧では、マーラと戦う力にならぬと、ウパグプタは断りました。

もう一人の僧が申し出ました。私は前世で腹を空かせた雌犬と子犬たちを見て憐れに思い、食いたばかりの飯を吐き出して食わせた功德への果報として、毎日二人分の食事を得ているのだと言いました。ウパグプタは大笑い。それこそ不浄の糧で、マーラ調伏（ちょうぶく）の力にはならぬと、みずから托鉢に出かけたのでした。

在家信者の願いを直接聞いてくれるウパグプタ像が、家や寺のどこに置かれているか、観察してみると面白いでしょう。（了）

主な資料

John S. Strong. The Legend and Cult of Upagupta. Sanskrit Buddhism in North India and Southeast Asia. Princeton University Press 1992.

奈良康明『仏教史 I』世界宗教叢書 7. 山川出版 1979.（説一切有部の長老ウパグプタに言及）